『国際関係学研究』第 46 号（2019 年）1-17 頁（津田塾大学）

「品質のよい政府を持つ」こと
―花森安治の「絶望」をめぐって―

葛　西　弘　隆

政府や政党や公社は、商社ではありません。経済よりもっと大切なものがある筈です。理想なき国、理想なき民族は亡びるでしょう。ほんとの＜公共のための仕事＞とは、みんなの暮しをこわさず、生きる命をそこなわない、ということです。政治も経済も、なにもかも、それをおかしてはならないはずです（花森安治、1975年）[1]。

世の中が乱れる、国が亡びる、というときは、もちろん、常識で考えられないことは、一つだけ起るのではない。いつでも、束になって、つぎからつぎへと起ってくるものである（花森安治、1973年）[2]。

1）はじめに―花森安治の1970年代を読む視座

花森安治は、戦後日本で活躍した編集者、デザイナー、ジャーナリストで、1948年に大橋鎮子と創刊した『暮しの手帖』の編集長として知られる。花森は人びとの生活にかかわる日常性の領野を「暮し」と名づけ、『暮しの手帖』では衣食住を中心に一般に「文化」とよばれるテーマを扱った。彼は文化的なものがつねにすでに政治的であることを十分に認識しており、衣食住というテーマ自体、戦略としての文化=政治とよぶべき編集方針によるものだったと理解される。というのも花森は、戦後日本の民主主義政治をささえる近代的主体の確立は、日常生活のミクロな諸相の合理化をつうじてこそ可能になると考えていたのである。その意味で、一見すると現実政治と無関係で、アカデミアとも無縁だった花森安治の思想と行動は、戦後日本政治思想史の興味ぶかいテクストのひとつとして読むことができる[3]。

『暮しの手帖』は、1953年にはじめた「商品テスト」の企画が評判をよび、1960年代後半までに発行部数80万部を超えるほどの成功をおさめていた。批評の独立を保つために企業からの広告を一切とらず、読者の定期購読を支えとする方針は、『暮しの手帖』に一貫する戦略的個性だった。こうして、花森のユニークな発想と企画による、「文化をつうじた政治」への批判的介入は、1960年代中期までにはひろく社会的に認められるところとなっていた。

本稿では、『暮しの手帖』の名声が確立して以降の、とくに花森の晩年にあたる1960年代末から1970年代にかけての民主主義政治をめぐるテク

1　花森安治「あの台風下、東海道線の列車は揖斐川の鉄橋をふだん通り渡っていた」、『暮しの手帖』第 2 世紀 38 号、1975 年、107 頁。

2　花森安治「乱世の兆し」、『暮しの手帖』第 2 世紀 22 号、1973 年、109 頁。

3　創刊当初の題名は『美しい暮しの手帖』だった（1953 年の 21 号まで）。花森安治については別の機会に論じたことがある。以下の拙稿を参照されたい。葛西弘隆「花森安治と戦後民主主義の文化政治」、『津田塾大学紀要』第 50 号、2018 年、葛西弘隆「花森安治と北海道――開拓・棄民・国家」、『国際関係学研究』第 44 号、2018 年。本稿は「花森安治と戦後民主主義の文化政治」で提起した読みをもとに、とくに 1970 年代の彼の政治観に焦点をあてて検討をくわえるものである。

なお、花森は、句読点を用いない、改行を多用するなど、しばしば独特のレイアウトで文章を書いた。本稿では引用の際、論文としての形式と読みやすさへの配慮から、句読点を入れる、空白を削除するといった変更を施していることを付記する。関心をもつ読者には、写真や文章の配置もふくめて花森自身の手になるオリジナルのテクストを味読することをすすめたい。

ストに焦点をあて、同時代状況とのかかわりのなかで彼が直面した文化政治の課題と困難について、政治思想史の視座から読み解くことを試みる。関心の焦点は、現実の政治経済が人びとの社会的・生物的生を毀損しつつあると認識されるとき、「文化」をつうじた介入はどのようなものでありうるのかということにある。1960年代末から1970年代にかけての花森は、以前とは異なり、『暮しの手帖』誌上で現実政治にかかわる諸問題を積極的にとりあげ、政府や大企業にたいするきびしい批判を展開するようになった。文化政治をめぐる花森のアプローチは、なぜ、そしていかに変化したのだろうか。1970年代中頃までに彼がいだくようになった現代日本への「絶望」の背景には、何があるだろうか。彼のペシミズムは、戦後日本の民主主義政治思想にとって、どのような意味をもつだろうか。

2) 公害としての政治

戦後日本についてひろく流布する歴史の語りにおいて、1960年代は、高度経済成長とそれにともなう「光」の面――所得倍増、東京オリンピック、新幹線や高速道路をはじめとするインフラ整備などと結びついた、あかるく積極的な社会的変化のイメージ――を中心に語られることが多い。しかし、輝かしいものとして語られる高度成長の「影」で、この時代にさまざまな社会問題が顕在化し深刻化していったことを忘れてはならない[4]。1960年代後半に『暮しの手帖』がとりあげたテーマを見渡してみると、日々の料理のレシピや生活の工夫のような、創刊当初から扱っていた題材とはあきらかに異なる色合いをもつ、経済成長がもたらす「影」の部分――ひとことでいうなら「社会問題」――を扱う記事やエッセイが増えていったことがわかる。そうした主題をとりあげる際、花森はしばしば「公害」の概念を用いた。公害という語は、一般的には同時代の水俣病をはじめとする四大公害病で知られるように、工業化・産業社会化の進展にともなう環境汚染の問題の文脈で用いられることが多い。事実、1960年代の『暮しの手帖』は、それらの公害病を重視し、記事にしていた。けれども花森の公害概念はそうした一般的な定義よりもはるかにひろく、1960年代から1970年代をつうじて、通常は公害として語られることのないさまざまな対象をもふくむ。たとえば、ヒ素ミルク事件やサリドマイド病のような食品にふくまれる人工調味料や添加物、化学物質や薬品にかかわる医療問題、世界の超大国が核実験で生み出す放射能といった問題、さらには日本国有鉄道（国鉄）の新幹線を暴走族とよび、特集記事を組んでその運行形態を批判する際にも、公害問題として扱っている[5]。端的に、人びとの暮らしを破壊する人間社会の活動は、花森にとってすべて公害なのである。これらの社会問題が現実政治（立法・行政、とくに経済政策など）とふかく関係していることから、1960年代末までに、『暮しの手帖』がとりあげる主題に政治や経済に直接かかわる問題が目立つようになることは必然だったといえる。『暮しの手帖』に掲載する花森のエッセイでは現代社会批判のトーンが前景化し、その主張は次第に戦闘的になっていく。文字テクストだけでなく、エッセイに彼が添える写真も、この時期には黒が目立つ色調のもの、内容も戦時中の風景や現代の工場の煙で霞む街並みのように、「暗い」印象を与えるものがすくなくない。

1968年に刊行された『暮しの手帖』の特集号「戦争中の暮しの記録」は、こうした変化のなかで生まれ、『暮しの手帖』にとっても花森にとっても、重要なターニングポイントになった。この特集号は、あらかじめ読者に戦争体験の投稿をよびかけ、予想を超えて集まったという多くの応募原稿から編集部が選んでまとめたものである。この企画にたいする編集部と花森の並々ならぬ熱意は、「あとがき」にしめされている。「ごらんのように、この号は、一号全部を、戦争中の暮しの記録だけで特集した。一つの号を、一つのテーマだけで埋める、ということは、暮しの手帖としては、創刊以来はじめてのことだが、私たちとしては、どうしても、こうせずにはいられなかったし、またそれだけの価値がある、とおもっている。……編集者として、お願いしたいことがある。この号だけは、

4　この論点に目配りのきいた近年の議論として、以下参照。成田龍一『近現代日本史との対話――戦中・戦後――現在編』（集英社新書、2019年）、栗原彬、テッサ・モーリス-スズキ、苅谷剛彦、吉見俊哉、杉田敦編『ひとびとの精神史』全9巻（岩波書店、2015年）、とくに栗原彬編『六〇年安保』（第3巻）、吉見俊哉編『万博と沖縄返還』（第5巻）。

5　花森安治「国鉄、この最大の暴走族」、『暮しの手帖』第2世紀37号、1975年。

なんとか保存してくださって、この後の世代のためにのこしていただきたい」[6]。花森は、この特集号に「戦場」と題する文章を寄せた。このエッセイは、1945年3月10日の東京大空襲を念頭に、ほとんどのページに黒い色調をもつ戦中の写真が用いられ、各ページ上方のごく限られた範囲に文字を収めるようレイアウトされている。花森は、アジア・太平洋戦争が、兵士の出征した「前線」だけではなく、「＜じぶんの家＞で暮していた」市井の人びとの生活の現場も戦場にしたこと、兵士と市民を問わず、戦争が人間の生の基盤を破壊したことを淡々と説明していく。そして空襲を受けた都市は戦場ではなく＜焼け跡＞と称され、空襲で亡くなった人びとは「戦死者」には数えられず、焼け出された人びとは「罹災者」とよばれた事実にも注意を喚起する。そして「この＜戦場＞で死んだ人の遺族に国家が補償したのは、その乾パン一包みだけだったような気がする」と、国家・政府の無責任を示唆する[7]。戦争を生きること自体が＜戦場＞にほかならないという花森の認識は、応募総数1736編から選ばれ掲載された読者の戦時体験（の記憶）と、しずかに響きあっていた。戦時の経験は、花森自身の体験としても、またこの特集に寄せられた読者の多様な経験からも、国家という存在への疑問を――生死を賭けた地点において――引き起こすものだった。

おそらく、花森の書いた文章でもっとも有名な作品のひとつと思われる、1970年の「見よぼくら一銭五厘の旗」という長編のエッセイは、この「戦場」の延長線上において読むことで、その趣旨をよりふかく理解できるだろう。みずからの戦時経験とその記憶から筆を起こすこの文章は、花森が、「終わった過去」にもまして、生きている「いま」への問いを見据えていることが、くっきりと浮かびあがってくるように構成されている。つまり、この時期の花森が戦争の経験と記憶を主題化することで意図していたのは、戦後社会へのラディカルな批判だった（さきの「戦争中の暮しの記録」という企画も現代社会批判の試みの一端として読むべきであることはいうまでもない）。このエッセイの後半で花森は、政府（政治）と大企業（経済）のありかたをターゲットに、戦後、そして現在の日本社会が直面する困難について読者に次々と問いかけていく。それは次のような具合である。

> 一証券会社が倒産しそうになったとき、政府は全力を上げてこれを救済した。ひとりの家族がマンション会社にだまされたとき、政府は眉一つ動かさない。もちろんリクツはどうにでもつくし、考え方だっていく通りもある。しかし、証券会社は救わねばならぬが、一個人がどうなろうとかまわないという式の考え方では、公害問題を処理できるはずはない。公害をつきつめてゆくと、証券会社どころではない、倒してはならない大企業ばかりだからだ。その大企業をどうするのだ。ぼくらは権利ばかり主張して、なすべき義務を果さない、戦後のわるい風習だとおっしゃる（まったくだ）。しかし、戦前も、はるか明治のはじめから、戦後のいまも、必要以上に横車を押してでも、権利を主張しつづけ、その反面、なすべき義務を怠りっぱなしで来たのは、大企業と歴代の政府ではないのか[8]。

戦後日本の人びとは、軍国主義から解放され、社会的自由を謳歌しているかにみえる。けれども実際には、現代日本の政治経済体制は大企業の利益を守り、彼らの利益を促進するようにはたらいている。政府は人びと（花森のいう「ぼくら」）の暮しをささえるどころか、むしろ積極的に人びとの暮しの条件を破壊しているではないかと、花森ははげしく憤っている。彼にとって、現代日本の政治経済体制こそ、公害の本丸であった。つまり公害とは、なによりもまず、政治の問題なのである。以後、1970年代をつうじて、花森はことあるごとに政府と大企業への批判を展開する。ただし花森の批判の対象は、企業と政府にとどまるものではない。批判の矛先は、そうした体制を生み出し、企業や政府の横暴を許してきた「ぼくら」にもむけられる。この時期以降の花森の文章には、政府（政治家）、大企業（資本家）を痛烈に批判したうえで、返す刀で市民の思考と行動を問い直す展開が定番となる。

花森は、政治社会を批判する際に、「うじゃじゃける」ということばをしばしば用いる。ふざけて

6　花森安治「あとがき」、『暮しの手帖』96号（戦争中の暮しの記録）、1968年、250頁。
7　「戦場」、『暮しの手帖』96号、1968年、6、10、15頁。
8　花森安治「見よぼくら一銭五厘の旗」、『暮しの手帖』第2世紀8号、1970年、17頁。

いる、おちゃらけているといった意味をもつと思われる独特の表現を用いることで、彼は、政治学の用語でいうならアパシー、つまり現代的な政治的無関心の問題に介入しようと試みていると理解できる。社会にたいする人びとの無関心や私化（privatization）の様相こそ、彼が探求してきた日常性の文化政治を弱体化させ、民主主義を侵蝕するものと認識されていたのである[9]。したがって、問われているのは、＜いま＞を生きる一人ひとりの人間の意識と意志、そして行動にほかならない。「見よぼくら一銭五厘の旗」では、ここで民主主義ということばを引っ張り出してくる。

> さて、ぼくらはもう一度、倉庫や物置きや机の引出しの隅から、おしまげられたり、ねじれたりして　錆びついている＜民主々義＞を探しだしてきて、錆びをおとし、部品を集め、しっかり組みたてる。民主々義の＜民＞は、庶民の民だ。ぼくらの暮しをなによりも第一にするということだ。ぼくらの暮しと企業の利益とがぶつかったら、企業を倒すということだ。ぼくらの暮しと政府の考え方がぶつかったら、政府を倒すということだ。それがほんとうの＜民主々義＞だ[10]。

誰のための政府、誰のための政治なのか。ここで花森は、はっきりと、政治的抵抗をつうじた民主主義の再構築を提起している。彼の思考は、国家と政府はその構成員の生存と福利のために人為的かつ道具的に制作されるにすぎないとする近代社会契約論の概念構成に依拠するもので、ジョン・ロックの社会契約論における抵抗権や、政府の改廃をめぐる議論を思い起こさせる[11]。そしてこの一節には、民主主義政治の根源的条件を構成する、政治的主体性と参加についての、花森のつよいメッセージが表現されている。選挙をつうじた代議制民主主義に回収されてしまうような消費者的民主主義や「おまかせ民主主義」とは異なる、日常性の政治学への賭けといってもよいだろう。こうして、文化政治をめぐる言説戦略からあくまで衣食住の具体性にこだわっていた花森は、1960年代後半以降の『暮しの手帖』の誌面において、政治を政治として語ることを隠さなくなっていた。それは、同時代にたいする彼の危機感の現れとして理解することができるだろう。彼はいう。「今度また、ぼくらがうじゃじゃけて見ているだけだったら、七十年代も、また＜幻覚の時代＞になってしまう。そうなったら、今度はもうおしまいだ」[12]。つよい危機感を背に、花森は、かつて「一銭五厘」の切手を貼った赤紙で召集され、「虫けら」のように扱われていた「ぼくら」が、戦争から20年以上たったいまこそ、「庶民」という集合性をつうじて自分たちの民主主義を賭けて立ちあがることを宣言する。

> ぼくらは、ぼくらの旗を立てる。ぼくらの旗は、借りてきた旗ではない。ぼくらの旗のいろは、赤ではない。黒ではない。もちろん、白ではない。黄でも緑でも青でもない。ぼくらの旗は、こじき旗だ。ぼろ布端布をつなぎ合せた、暮しの旗だ。ぼくらは、家ごとにその旗を、物干し台や屋根に立てる。見よ、世界ではじめての、ぼくら庶民の旗だ。ぼくら、こんどは後へひかない[13]。

記事にも写真が添えられた花森自作のこの旗は、自らお気に入りのエッセイをまとめた単行本『一銭五厘の旗』（1971年）の表紙に採用され、長年、暮しの手帖社のオフィスに掲げられたという[14]。「ぼろ布端布をつなぎ合せた、暮しの旗」は、ブリコラージュ的な『暮しの手帖』の思想を象徴し、花森流に戦後民主主義の精神を表現するアイコンとなった。旗は「ぼくら」と政府・大企業とのあいだで、文化がつねにすでに政治闘争たらざるをえないことを示唆するものであり、政府と大企業に「ぼくら」を対置することで、彼が「暮し」とよぶ

9　同時代の私化をめぐる議論については以下参照。丸山眞男「個人析出のさまざまなパターン――近代日本をケースとして」、『丸山眞男集』第9巻（岩波書店、1996年、初出は1968年）。

10　花森「見よぼくら一銭五厘の旗」、18頁。

11　花森が社会契約論の発想に裏打ちされた戦後民主主義者であることについては、前掲の拙稿「花森安治と戦後民主主義の文化政治」を参照。

12　花森「見よぼくら一銭五厘の旗」、18頁。

13　同前、19頁。

14　『「花森安治の仕事――デザインする手、編集長の眼」展図録』（読売新聞社、2017年）、310頁。

文化の領域こそ、人びとの生とその日常性を媒介とする政治の重要なアリーナであることを、花森は、かつてよりはるかに直裁なかたちで読者に訴えかけるようになった。それでもなおこの時点においては、日常生活をつうじて自分のアタマでものを考える主体性の構築を求める点で、花森が戦後初期から追い求めてきた、個人主義的合理主義の深化という戦略の線上にあると理解することができるだろう。

3)「幻覚の時代」への抵抗

戦闘的民主主義とでもよぶべき、現代社会にたいする花森の態度表明は、1970年代にかけてもつづく。『暮しの手帖』はより頻繁に社会問題をとりあげるようになり、花森は、近視眼的な経済と政治の私物化が人びとの暮らしを破壊することの危険性への警告を、いっそう明確に打ち出すようになった。ただし、その批判は先鋭化すると同時に、悲観的なニュアンスが前面に出てくるようになる。「見よぼくら一銭五厘の旗」の前年、1969年の『暮しの手帖』第2世紀1号を飾る花森のエッセイ「もののけじめ」には、すでにその傾向を読みとることができる。社会のルール（「もののけじめ」）を主題とするこの記事は、社用族とよばれるサラリーマンに公私混同の金づかいや行動様式がひろがっていることを指摘するところからはじまる。深夜タクシーの乗車拒否、公営ギャンブル、商品テストで調べた低品質の全自動洗濯機など、花森らしく硬軟おりまぜあちこちに話が飛びながら展開するエッセイの後半で熱量をもって語られているのが、政治のありかたについてである。彼は、政治こそ「ルール」が崩壊しているではないかと読者に問いかける。

> どうしてもけじめをつけてもらわなければならないのは＜政治＞である。いったい政治は、だれのためにやっているのか。昨今これくらい、うじゃじゃけているものはないだろう。はやい話が、米のねだん一つを決めるにしても、河の水の汚染基準一つを決めるにしても、いったい、だれのために政治はあるのか。それを忘れてしまって、目のさきの票や、目のさきの利害だけにこだわっているのが、最近の政治ではないか[15]。

政治腐敗にたいするこうした憤りが、1920-30年代前半に学生時代を過ごした花森の軍国主義・ファシズムの記憶をつうじて言語化されていることは強調しておくべきだろう。自らの経験をもとに、「政党や政治に、けじめがなくなったときが、独裁者のいちばん生まれやすいときである」と述べる[16]。ただし、独裁はどこか外部から一方的に入りこむものではない。学生時代に大学新聞、そして卒業後から宣伝・広告業界に身を置き、1940年代の戦時中に大政翼賛会で戦争プロパガンダに従事していた花森は、そうした政治の堕落とそれを歓迎する人びとの行動様式がマスメディアのありかたとふかくかかわっている事態を、きわめて重くみていた。ファシズムが「上からの抑圧」だけでないことを、彼は当事者としての経験をつうじて理解していたのである。「独裁者は、どこの国でも、いつでも、国民に歓呼されて、登場してくる。いまの政治家は、そのことを忘れていはしないだろうか」[17]。倫理を欠いた「迎合の時代」は、「その日暮しの無定見と、やり場のない倦怠感と、焦燥感」を生み出す。このエッセイでは、例として、読売系列のNTVで放映されていたテレビ番組「コント55号　裏番組をブッ飛ばせ!!」を槍玉にあげる。花森によれば、この番組は、野球拳でゲストの女性の衣服を脱がせ、その服を売ることで恵まれない人たちへの寄付金を集めていた。それが週末のゴールデンタイムに全国ネットで放送されていることの意味をきびしく問い、「低俗とか、ハレンチとかいう言葉では、もはや追いつかない」と述べる。批判されているのは番組制作者だけではない。彼は、最大の責任は番組スポンサーにあるとして、資生堂と大正製薬を名指しで批判する。花森にとって、社会的倫理の喪失がもたらす大衆文化の低俗化は、規範を喪失し、ルールを無視する今日の政治の別の表現にほかならなかった。花森はいう。

> 野暮なことはいいっこなし、おかたいことはごめんだ、そういうふうが、世の中に、しだいに

15　花森安治「もののけじめ」、『暮しの手帖』第2世紀1号（通算で101号を意味する）、1969年、106頁。
16　同前、106-7頁。
17　同前。

満ちてきつつある。政治のあり方をみて、腹も立たず、しかたがないと、うすら笑いをうかべ、ばかげたテレビ番組に、うつつをぬかし、野暮なことはいいっこなしで暮しているうちに、やがてどういう世の中がやってくるか。もののけじめを、はっきりさせようではないか[18]。

この警句は、社会のルールをつくり、守ることは大人の責任であるとのことばで結ばれている。ある意味で、この時期の『暮しの手帖』の課題は、社会生活に圧倒的な影響を及ぼしている政治経済における「もののけじめ」を再構築することにあったとさえいってもよいかもしれない。『暮しの手帖』は、すでに1965年に「テレビの放送時間を短かくしよう――慢性テレビ中毒症から私たちをまもるために」という長編の記事を組み、テレビ放送の両義性に注意を喚起していた。この頃から、テレビ放送を公害のひとつと考えていたことがうかがえる。それが1970年頃になると、具体的な番組を名指しして批判するようになる。『暮しの手帖』誌上で読者に意見を募り、上述の意味で「低俗」なテレビ番組を批判する企画を組み、「テレビの番組を買って、コマーシャルを流すということは、単に自分の会社の宣伝をしているだけのつもりかもしれないが、番組を提供するということは、その番組の内容に責任をもつということである」とスポンサー企業の行動にも警告を発するようになった[19]。非政治的で低俗な大衆文化の現代的なありようもまた、彼が「うじゃじゃける」とよぶ、民主主義政治のルールを機能不全へと陥れる危険な徴候と認識されていたのである。

ところで、現実政治への幻滅の背景には、目の前で起こっている個別具体的な出来事への違和感や怒りだけでなはく、国民国家とその政府にたいする根源的な疑念があったことも忘れてはならない。いうまでもなく、国家とその政府への懐疑は、民主主義政治にとっての障害ではなく、むしろそれを「健全」に機能させるための条件の一部である。花森の場合、それはおもに戦時から敗戦にかけての自己の体験に由来し、その疑いは、現代日本の国家体制にも同じようにむけられていた。花森は、「＜くに＞とは、いつでもなにか不当にいためつけてやろうとたくらんでいる、そんなもののような気がしてならない」という[20]。1970年前後の花森の文章には、こうした国家観の表明がそこかしこに見られる。「日本という＜くに＞は、いま総生産世界第二位などと大きな顔をし、驚異の繁栄などといわれてやにさがり、そして、したり顔をして、みずから＜くに＞を守る気概を持て、などと叱りはじめている。……よっぽど、この日本という＜くに＞は、厚かましい＜くに＞である。いつでも、どこでも、＜くに＞を守れといって、生命財産をなげうってまで守らされるのは、日ごろ＜くに＞から、ろくになんにもしてもらえない、ぼくたちである」[21]。花森を突き動かしているのは、戦後の日本社会が、とりわけ高度経済成長のもとで、政治の「質」という面において根本的な間違いを犯しているのではないか、国家は私たちを「ふたたび」だましているのではないかとの認識である。そのことは、1972年の「みなさん物をたいせつに」という長編記事に顕著にあらわれている。このエッセイは、高度経済成長下の商品生産と消費のシステムに疑問を投げかける内容で、そこには彼の問題意識がラディカルに表現されている。たとえば、次の一節を見てみよう。

ひとの暮しに役に立たなくても、人の暮しをダメにすることがわかっていても、売れさえしたらそれでいい、売れるためなら、どんなことでもする、そんな会社や人間ばかりだ。そんな会社や、そんな会社の後押しをした政府が、いま、日本の繁栄をつくりあげてやったのは、じぶんたちだ、と胸を張っているのだ。そうなのか、ほんとうにそうなのか。それなら、見るがいい。そんな企業を後押しにしてきた政府よ、見るがいい。誇らしげに、君たちが作り上げたという、

18 同前、107頁。

19 「これは困る、いかになんでもひどい、そういうテレビ番組があったら投票してください――番組提供者に考え直してもらうために」、花森安治「番組制作者の責任について」、『暮しの手帖』第2世紀3号、1969年、116-119頁。前者の記事では、その意図が次のように説明されている。「これは、一種のマイナス投票です。……視聴率というヘンなものに左右されている番組提供者（民間放送ではスポンサー）に、もう一つ別の＜数字＞、どれだけの人間がその番組に反対しているか、いわば＜反対数＞を積み上げて、もう一度よく考え直してもらおうというわけです」（119頁）。

20 花森安治「国をまもるということ」、『暮しの手帖』第2世紀2号、1969年、105頁。

21 同前、107頁。

> その世の中を　目をそむけないで、はっきりと見るがいい。繁栄とは、なにか。ゆたかな暮しとは、なにか[22]。

現実政治は人びとの暮しにいったい何をしているのか。高度経済成長がもたらしたとされる豊かさとは、ほんとうに望ましいものなのか。GNP/GDPによって説明される経済的繁栄は、人びとの生に何をもたらしているのか。誤解のないように確認しておくと、花森は資本主義社会における営利そのものを否定しているわけではない。『暮しの手帖』の名声を確立したといわれる「商品テスト」シリーズについて、花森は「商品テストは消費者のためにではない」と言い切る。「メーカーが、役にも立たない品、要りもしない品、すぐこわれる品、毒になる品を作らなければ、そういうものを問屋や小売店が、デパートやスーパーマーケットが売りさえしなければ、それで事はすむ」と断言し、つくり手の側に、技術とともに価値意識や社会倫理が求められることを強調した[23]。つまり花森は、大企業を批判することをつうじて、自由な経済活動が、GNP/GDPのような数値化される国家的指標には反映されない価値や倫理といった人間社会における規範との結びつきを喪失することで、うわべだけの繁栄だけを追い求めるようになり、結果として、人びとの生をめぐる価値剥奪が進んでいることを問題にしている。そして、政治が人間の生の価値を肯定し、深化させるどころか、それに逆行する政策を積極的に推し進めることで、人びとの生の条件を毀損している事実を批判しているのである。花森の怒りはおさまらない。

> ひとのゼニだとおもって、買えよ捨てよとはやすのが近代企業というものなら、なけなしのひとのゼニを、ふたこと目には差押さえるぞと、情け容赦なく取り上げるのが、近代国家というものか。それが、税金というものか。取ってしまえば、それまでか。なんだい、取り上げたゼニの、この使いぶり。いったい、ほくらのゼニをなんとおもっているのだ[24]。

花森はつづけて、自分たちの暮しをよりよくするために納めているはずの税金は、いったい何に使われているのかと問う。「ぼくら」は、家族が「気のきいた」服を着て、「人間らしいものを食べ」ることさえ我慢して税金を払っている。その税金で「戦車やミサイルやジェット機を買ってもらいたくない。……兵隊やおまわりをふやしてもらいたくない。ぜったい、ことわる」[25]。政治家が「じぶんだけの損得と名聞にとらわれて」、同じ社会に生きる人びとの苦しみをふみにじり、「＜いたわり＞」を忘れたことを嘆く。彼は政治家にたいして、「そんな目でぼくらを見ないでくれ。ぼくらは＜票＞ではない。ぼくらは人間だ。あなたと同じ人間だ」と訴える。そして、花森は、「政治家よ。……じぶんだけの損得と名聞にとらわれて、あなたといっしょに生きて暮している人たちの苦しみを、平気でふみにじっている。ほとんど、あなたに絶望しようとしている」とまで書くようになった。ここで「絶望」という語を用いていることに留意しておこう[26]。そして企業家にたいしては、「じぶんの手で作り出したもの、じぶんの頭で考えついたもの……への誇り」を失い、その心は「泥で作った金銭登録器」に落ちぶれたと指弾する[27]。「見よぼくら一銭五厘の旗」の場合と同じように、政治家と大企業にたいする辛辣な批判につづけて、人びと（「ぼくら」）の意識と行動にはたらきかけることばで文章を結ぶ。

> ぼくらよ。いささかおっちょこちょいで、虫けらのごとき、ぼくらよ。ぼくらのこころの中から急速に失われていったものを、いまやっと、ぼくらは知った。それは、物をいとおしむこころだ。物のいのちを大切にするこころだ。ぼくら、ついうかうかと言いなりになって、買って

22 花森安治「みなさん物をたいせつに」、『暮しの手帖』第2世紀16号、1972年、11頁。
23 花森安治「商品テスト入門」、『暮しの手帖』100号、1969年、86-87頁。
24 花森「みなさん物をたいせつに」、16頁。
25 同前、17頁。
26 同前、18頁。
27 同前。なお、この前年に花森が書いた「禿鷹のような商人」では、＜親ばか＞にあてこんで子供用の学習机から化粧品まで売り込む販売方法を例に、「役に立とうが立つまいが、有害であろうがなかろうが、とにかく売れるものならなんでも売る」と批判し、消費者の効果的な武器として不買運動をよびかけた（花森安治「禿鷹のような商人」、『暮しの手帖』第2世紀11号、1971年、13、19頁）。

> は捨てていたのだ。捨てていたのは物のつもりだった。危ないところだった。捨てていたのは、じつは、こころだった[28]。

「こころを捨てていた」というフレーズは、花森らしいというべきか、いささかナイーヴに聞こえないでもない。ただし論旨は明快である。ここには、消費ばかりが肥大化した経済的豊かさが、結局のところ人間的な価値と生存を貶めるものだとの認識が一貫して提示されている。こうした認識には、1960年代以降の国内の公害問題、1970年代初頭にかけて世界的に議論が起こっていた成長の限界をめぐる議論、そして地球環境問題がつよく関係していることは疑いない。また、花森自身が1960年代末に病を得たことをきっかけに、後の世代に託す世界への危惧がつよくなったことも背景にあるかもしれない。これら複数の要因を背景として、花森の政治的想像力は希望と絶望のあいだで揺れうごいているようにみえる。このエッセイは、「でも、まだ、間に合いそうだ。みなさん、物をたいせつに」と結ばれている[29]。

同じく1972年の「1平方メートルの土地さえも」というエッセイでは、土地価格高騰により庶民には住まいの取得が困難になっていること、その背景に政府の大企業優遇政策（そして庶民にたいする無策）があることを具体的に指摘したうえで、土地価格凍結と政府保証というアイデアを提案する。そして、庶民（ぼくら）とって政治の課題とは「品質のよい政府を持つ」ことにあると指摘する。

> 1平方メートルの土地も持つことのできない＜日本人＞が、半分以上もいることを知っていて、どうするでもない政府、それをだまってみている政党、そして、あきらめかけているぼくら。でも、きみよ、あきらめることはないのだ。決して、あきらめることはないのだ。ぼくらを＜日本国民＞とよぶのなら、それなら、ぼくらが生きて暮してゆける土地と住まいを一生けんめい考えてくれる、それが政府というものだからだ。政府というものは、そういうものでなければならないからだ[30]。

政府ははたして国民のために仕事をしているのか。この問いは、この時期に花森が書いた文章を貫く主題となっている。彼の認識はもちろん「否」である。それでも「あきらめることはない」とくりかえすこのくだりは、花森自身を奮い立たせようとしているようにも読める。希望と絶望のあいだで揺れうごいていた花森は、1973年に始まった第一次オイルショックと狂乱物価のさなかに『暮しの手帖』に寄せた「買いおきのすすめ」で、次のようにも記している。

> 政府よ。政治家よ。大企業よ。大商社よ。もうこれ以上、ぼくらをふみつけにして、目のまえのモウケに走るのをやめなさい。もうこれ以上、調子のいいことをいって、ぼくらをごまかすのをやめなさい。……もうこれ以上、ぼくらをバカにして、ナメてかかるのをやめなさい。ぼくらは、どんなことをしても、じぶんの暮しは、自分でまもるのです。これ以上妨害しないで下さい[31]。

この一節は、一見したところ一銭五厘のエッセイからつづく、政府や大企業への批判と読める。たしかに批判していることにはちがいない。ただし、ここでは彼の強調のポイントが移行しつつあることに注意を払っておきたい。それは、花森にとってもっとも重要な概念である「暮し」の位置づけにかかわっている。彼は、先の戦争を防ぐことができなかった根本的な要因を、一人ひとりが自らの生活のミクロな部分――その総体としての生――を大切にしてこなかったことに起因すると理解し、『暮しの手帖』をはじめとする戦後初期からの一連の取り組みをつうじて「守るに足る暮し」の確立につとめたのだった。一人ひとりの市民がその日常性において「守るに足る暮し」をしっかりともっていれば、新たな戦争やファシズムの可能性への抵抗の拠点になると考えたのである。それにたいして、この文章では、政府や企業の横暴か

---

28 花森「みなさん物をたいせつに」、19頁。花森のすこし後に、政治思想史家の藤田省三は「新品文化」という概念を提起して、ある意味では花森と類似の問題に接近しようとしていた。藤田省三「新品文化――ピカピカの所与」、藤田『精神史的考察』（平凡社ライブラリー、2003年、初出は1981年）。

29 花森「みなさん物をたいせつに」、同前。

30 花森安治「1平方メートルの土地さえも」、『暮しの手帖』第2世紀17号、1972年、19頁。

31 花森安治「買いおきのすすめ」、『暮しの手帖』第2世紀28号、1974年、113頁。

ら「じぶんの暮し」を守るとされている。言葉づかいこそ似ているものの、この表現には、長年にわたって彼がその確立を求めていた「守るに足る暮し」の確立が現実には実現しておらず、その状況で政治経済政策（とくにオイルショックとの関連で）が、「暮し」とよぶものに土足で立ち入ってきているとの認識を看取できる。そのため、彼の概念構成においては文化=政治の＜出発点＞であり＜戦略的拠点＞であったはずの「暮し」が、ここでは、政治や経済＜から守るべき＞別の審級において設定されるようになってきていると読むことができる。

オイルショックが引き起こした物価高騰のさなか、花森は次のように述べる。「ぼくらは、いま煮えたぎる怒りを、じっとこらえているのです。ぼくらは、身を切られるつらさを、ぐっと歯をくいしばって、こらえているのです」[32]。そして、自民党の田中角栄内閣の金脈問題が明るみに出た1974年には、「政府や、自治体や、公社、あるいは公共性の強い企業をやっている人たちは、万一ぼくらの暮しを困らせるようなことがあったら、その責任を負って辞職する、そういう仕きたりをハッキリと、ここにつくりたいのである」と、現実政治における責任を問うている[33]。けれども＜ぼくら＞にたいする結果責任がはたされることはなく、その怒りは次第に行き場を失っていく。

4）戦後への決別と未来の喪失

花森は、1973年の『暮しの手帖』に「28年の日日を痛恨する歌」という長編を発表した。ここでは、ここまで検討してきた戦後批判が、疑問という水準をこえて、「悔恨」として語られるようになる。彼が観察してきた「公害としての政治」認識と、8月15日の戦没者追悼という、歴史の記憶の契機が交差する地点で、現在の花森の政治観が、率直かつ重い言葉で述べられている。

> ぼくらは、こんな世の中にしてしまうために、あの日から二十八年も生きのびてきたのではなかった。あのとき、何百万という人間が死んだ。死にたくて死んだ人間など一人もいなかった。何百万という人間が、国のために殺されたのだ。あのとき　ぼくらは、もうおのれの欲のために、ひとの幸せをふみにじるまいとおもった。あのときぼくらは、これからさきの人生は附録だとおもった。それなのに、その附録の人生で、ぼくらはなにをしてしまったのだろう[34]。

戦争を生き延び戦後を迎えることのできた自分たちがつくってきた日本社会とは、いったい何だったのか。はたして人びとは幸せなのか？　花森は戦後日本が袋小路に入り込んでしまったと認めていることはあきらかだろう。目先の利益にとらわれて、あるいは反対のための反対の論理にとらわれて、現実政治（政党政治）への参与のありかたを間違ってきたのではないかと問う。

> ぼくらは、わずかな米のねだんや、雀の涙ほどの年金や、ちいさな橋や、ちいさな学校と引きかえに、大企業を支持する政党へ一票を入れた。ぼくらは、その政党に反対する政党が、じっさいには、大きな声で反対するだけで、なにもできはしない裏の裏を承知で、その反対党へ一票を入れた。ぼくらは、それだけで、なんにもしなかった[35]。

選挙を通じた現実政治へのはたらきかけを「なんにもしなかった」との認識は、戦争による死者への追悼を媒介として、過去の戦争の記憶を経由しつつ現在および未来への責任の認識へとつながっている。つまり、ここでは、＜過去＞をつうじて＜いま＞と＜未来＞が問われている。「ぼくらは、みんな、じぶんのこどものことを忘れていた。こんなひどい世の中に、これからもっとひどくなる世の中に生きていかねばならない、ぼくらのこどものことを、そのまたこどものことを、ぼくらはどうしたらよいのか」[36]。しかしその見通しは、ひとことでいうなら、あまりにも暗い。1970年代の花森にとって、未来とは「すでに失われたもの」として見えていたのではないか。この時期に花森が書いた記事のタイトルをいくつか並べてみるだ

32　同前、113頁。
33　花森安治「公共料金の値上りと総理大臣」、『暮しの手帖』第2世紀33号、1974年、107頁。
34　花森安治「28年の日日を痛恨する歌」、『暮しの手帖』第2世紀25号、1973年、14頁。
35　同前。
36　同前、14-15頁。

けでも――「未来は灰色だから――こどもたちに、いま親たちがしてやらねばならないこと」、「もう、時間はいくらも残っていない」といった具合に――その感触を読みとることができるだろう[37]。

こうして、未来の喪失という感覚をつうじて、花森の戦後批判は、自らが犯した「罪」として語られるようになる。「ひどい世の中を、大企業と、その後押しをする政府が作ってしまった」[38]。それは、大企業と政府だけでなく、戦後の「ぼくら」の狂気が生みだしたものでもある。「悔しいことだが、こんなひどい世の中にしてしまったのは、君らだけの罪ではなかったのだ。悔やんでも悔やみきれないのだが、君らが狂ってしまって、血眼になって、もうけだけに走るのを、だまって見ていて、止めようとしなかった、ぼくらも狂っていたのだ」[39]。このような認識のもと、毎年8月15日に行われる政府主催の全国戦没者追悼式を批判しつつ、次のように述べる。

> 死んでいったあの何百万という人たちに対して、その死のつぐないがこのザマだと、生き残ったぼくらがはっきり言うのでなければ、ありきたりの追悼の言葉など、なんにもなりはしないのだ。ぼくらに必要なのは、あんな紋切型の追悼式ではなくて、あの敗戦の日、大人だったぼくらひとりひとりの心の中の慰霊祭だ。ぼくらは、そのたったひとりの慰霊祭で、どんなにつらくても、苦しくても、痛烈なおもいをこめて、あなたがたの死によってあがなわれたのがこんな世の中だということを、そして、こんな世の中を作り上げたのは　ぼくらだということを。その肺腑をえぐる挽歌を、死んでいった何百万のひとのまえで、はっきりとうたわねばならないのだ[40]。

ここでの花森の言明が、「戦争の犠牲のうえに戦後日本の繁栄がある」といった類の、しばしば耳にする定型句とまったく異なることに注意しよう。花森ははっきりと、戦争の犠牲のうえに築かれたはずの戦後日本の繁栄がまちがいだった、失敗だった、狂っていたといっているのである。したがって、8月15日という敗戦記念日にちなんで発せられたメッセージの核心にあるのは、一般的な意味での戦争による犠牲者への追悼でも、いわんや戦争と植民地支配を肯定する戦後保守の立場からしばしば発せられる戦死者への「感謝」でもなく、戦後日本の到達点としての現在の無様なありようを、自己の責任において引き取ろうとする「贖罪」への意志にほかならない。それが、戦後日本についての花森流の「もののけじめ」であり、「大人の責任」のとりかただった。このエッセイが「挽歌」と題されているのは、この意味においてである。

関連して、さきの「みなさん物をたいせつに」で問われていた戦後の経済復興と「繁栄」の虚妄について、ここでは、冷戦下の東アジアの内戦と戦争に起因する歴史的事実にも言及されている。「朝鮮人みんなの不幸をこやしにして、敗戦国日本の企業は肥っていった。朝鮮戦争がやっと終わったら、しばらくして、ベトナム戦争がはじまった。ベトナム人みんなの悲惨と困窮と嘆きを踏み台にして、鼻歌をうたいながら、敗戦国日本の企業はますます肥っていった。いうなれば、濡れ手に粟でつかんだ繁栄だ」[41]。そして「人の不幸をだしにして肥っていく、人の弱点につけこんで売上げを伸ばしてゆく。これではケモノといわれても、返す言葉があろうはずもない」[42]。1960年代末に「戦後」を問いはじめた花森は、1970年代前半までに、はっきりと「戦後の失敗」を認める地点に到達した。「虚妄の戦後」を、日本帝国による植民地支配と戦争を肯定し、戦後日本の民主主義体制を葬り去ろうとする、いわゆる「戦後保守」の位置からではなく、まさしく戦後民主主義を擁護する視座をつうじて批判していることこそ、ここで重要なポイントである[43]。

---

37 花森安治「未来は灰色だから――こどもたちに　いま親たちがしてやらねばならないこと」、『暮しの手帖』第2世紀21号、1972年、花森安治「乱世の兆し」、『暮しの手帖』第2世紀22号、1973年、花森安治「もう、時間はいくらも残っていない」第2世紀30号、1974年。

38 花森「28年の日日を痛恨する歌」、14頁。

39 同前、12-13頁。

40 同前、15-16頁。

41 同前、8-9頁。

42 同前、9-10頁。

43 花森は日本国憲法、とくにその第9条をたかく評価していた。花森安治「国をまもるということ」、『暮しの手帖』第2世紀2号、1969年。彼の平和論については別の機会に論じたい。

もはや明るい未来を思い描くことのできず、「灰色」でしかない現実を認めたうえで、花森は、繁栄をつくるのではなく、捨てることを宣言する。「ぼくらは、自分のこどものために、そのまた、こどものために、ぼくらだけは、狂った繁栄とわかれて、そこへ戻ろう、そこから出直して、ぼくらは、じぶんのつくった罪を、自分の手であがなってゆこう。ぼくらの暮しをおびやかすもの、ぼくらの暮しに役立たないものを、それを作ってきたぼくらの手で、いま、それを捨てよう」[44]。かくして、1973年8月15日の「慰霊」にちなんで花森が世に問うたのは、「一切の罪はぼくらにある」戦後日本についての贖罪だったのだ。戦後日本の繁栄は「狂気」だったのであり、その狂気の清算こそ、晩年の花森が引き受け、最期まで問いつづけた課題だった。もはやここには、衣食住を柱とする「暮し」の合理性を市民が獲得することに賭けていた戦後初期の花森はいない。「戦後」とは＜つくる＞べき未来への目標ではなく、＜捨てる＞べき現在を意味した。

悲観的な時代認識をいだきつつ、花森はその後も社会問題を語りつづける。オイルショックに端を発する物価高騰は、人びとの暮しを直撃していた。花森らしく、日々の生活に欠かすことのできない食材から、人生最大の買い物といわれる住居にいたるまで、暮しの現場を継続的な調査を自分たちで行い、具体的なデータを集めて記事にすることをつうじて、＜ぼくら＞の日々の暮しを守るための方策を提示し、現実政治の無策と無責任を問いつづけた[45]。

5）投票ストライキ

1976年、ロッキード・スキャンダルの渦中で田中角栄前総理大臣が逮捕された。田中の後を継いでいだ三木武夫首相のもとで、12月に任期満了にともなう衆議院議員選挙が行われる見通しのなか、花森は、秋に刊行された『暮しの手帖』に、「ぼくは、もう、投票しない」という挑発的な響きをもつ題名のエッセイを寄せた。ここには、現実政治への「絶望」というべき認識が、いつもと同じ平易なことばで記されている。「ぼくら」の旗を掲げた戦闘的民主主義はどこにいってしまったのか。彼の思考をたどってみよう。

冒頭から彼は宣言する。「ぼくは、もう、投票しない。また選挙がやってくるが、ぼくは、もう、どれかの政党の、だれかに投票することはしない」。しかし棄権するのではないという。「投票する、ということは、ぼくのもっている、ごくわずかな権利のうちの一つである。だから、だれかに投票はしないが、棄権するつもりはない」[46]。投票所には出向くけれども棄権しないとは、どういうことなのか。花森はこう説明する。

> 投票所へいって投票用紙をもらうと、あの、候補者の名前を書く、ひとりずつ仕切られた小さな台のところまでゆく。その台の上に投票用紙をおき、備えつけてある鉛筆で、候補者の名前を書くワクのなかに、まず斜めの線をぐいと一本引く。つぎに、それと直角に交わるように、もう一本斜めの線を引く。×　つまりバッテンをつける。そして、投票用紙をタテに二つに折って、投票箱のところへ持ってゆき、箱の上の小さい口から、中へ落す。そして帰ってくる。僕が棄権しない、というのは、こういうことなのである[47]。

投票には参加するけれども候補者を選ぶのではなく、×印をつけて意図的に無効票を投じるこの行為を、花森は「投票ストライキ」と名づける。もちろん、それが政治的には「無意味」であることを花森は承知している。「それがいったいなんの役に立つのか、ただ無効投票を一票ふやすだけ、それだけのことではないか、ともおもう」[48]。そのいっぽうで、この行為が、ストライキをする権利にもとづいた表現であると主張する。「ストライ

44　同前、16-17頁。

45　たとえば以下参照。「スーパーは安いか」、『暮しの手帖』第2世紀27号、1973年、「乱世物価乱気流」、『暮しの手帖』第2世紀28号、1974年、花森安治「買いおきのすすめ」、同前。

46　花森安治「ぼくは、もう、投票しない」、『暮しの手帖』第2世紀44号、1976年、54頁。この時期の手帖がとりあげた政治と選挙にかんする署名記事には以下のものがある。松田道雄「浮動票のすすめ」、『暮しの手帖』第2世紀42号、1976年、浦松佐美太郎「民主主義について」、『暮しの手帖』第2世紀46号、1976年。

47　同前、54-55頁。

48　同前、55頁。

キをしたという気持をはっきりあらわすために、大きく堂々と×を書いてくるのである」。ここで花森が「ストライキ」と称する行動が、労働運動における闘争の手段としての意味とはまったく異なると指摘することはむずかしいことではない。さらに政治学的にみても、日本の国政選挙では単純多数原理で当選者が決まるため、無効票は候補者の当選・落選、つまり選挙結果への直接的影響という意味ではまったく抵抗にも変革の表現にもならないことも確認しておこう。もちろん、それは花森自身もよくわかっていたことである。重要なのは、あらたな望ましい現実を生み出すことの期待できない行為を花森に選択させた、その理由のほうにある。ここでは、民主主義政治についての花森の認識と、彼自身の思考のクセ（かりにそのように名づけておくことにしよう）のふたつの面から検討したい。

花森は、これまで選挙の投票には欠かさず参加してきたという。選挙がたんなる人気投票ではなく、黒とかぎりなく黒にちかいグレーを区別して選びとるような実践であることを、彼は十分に認識し、その都度選択してきたという。

> 投票して帰ってくるとき、一つの役目を果した、という気持にまじって、なんともしらじらしい、むなしい気持ちが、いつも強かった。……どうせ、ぼくの一票がどっちへころんでも、天下の大勢がかわるわけはない、というきがするのを、いやいや、すこしはマシな候補者が、一票の差で、すこしもマシでない候補者にまけたとしたら、そのすこしはマシな候補者に投票しないで棄権したぼくは、大いに後悔するにちがいない、とおもいなおして投票所へ出かけていった[49]。

けれども、この年のロッキード事件で、いよいよ堪忍袋の尾が切れたという。「それが、このごろ、もうどうにもガマンしきれなくなった。バカにするのもいい加減にしろ、という気が、むらむらとおこってきた」。ロッキード事件で疑惑があきらかになった政治家は、誰ひとりとして国民にたいする謝罪をしていない。「こんどぐらい、いまの政治家の考えていることを、ハッキリ見せてくれたことはなかった」。では、彼らは誰を見て、そして何を考えて仕事をしているのか。「みんな、じぶんのことだけ、じぶんの派閥だけ、じぶんの党だけである。日頃そんな考えで、走りまわっていた、ということである」。花森にとって、ロッキード事件があきらかにしたのは、民主主義の名のもとで、現実には国民主権の原理にもとづく政治などはなから機能していないという――うすうす気づいていても、全面的に認めることを躊躇していたかもしれない――現実だった。「ぼくら」、つまり国民の暮しを無視する点において、じつは現在が戦時期と変わらないではないかという憤りが、花森を駆りたてる。「国民の多数は、じぶんの投票した代議士に、白紙委任状まで渡したわけではない」。にもかかわらず、政治家は、「国民の多数にえらばれた代表である、と胸を張りたがる」[50]。民主主義論としては、問題は個々の政治家の態度の水準にあるというよりも、それ以上に、戦後30年が経過した日本の民主主義政治の基本構造にかかわっている。民主主義政治は機能しているか。さらには、そもそも現代日本の政治を民主主義とよぶことができるのか。彼の疑問は代議制民主主義の制度的根幹へとむかっていく。

> どうやら、ぼくらの一票も、なんのかんのとおだてられながら、そのじつは、いかにも民主主義にのっとって、ひろく国民にえらばれた、というカタチを作り上げるためのダシではないのか。一度そういうカタチをとって＜えらばれた＞ら、もうその瞬間から、えらんだ人と関係なく、勝手に歩きはじめる。えらんだ人と関係なく、言いたいことを言い、したいことをする。そして、じぶんは多数の有権者を代表しているのだとうそぶく。しかも、えらんだぼくたちは、そんなことをしてくれとたのんだおぼえはないのに、それをどうすることもできないで、アレヨアレヨと見ているより仕方がない[51]。

この一節は、ジャン・ジャック・ルソーの古典的なイングランド批判――「イギリスの人民は自由だと思っているが、それは大まちがいだ。彼らが

---

49 同前、56頁。
50 同前。
51 同前、57頁。

自由なのは、議員を選挙する間だけのことで、議員が選ばれるやいなや、人民はドレイとなり、無に帰してしまう」――を想起させる[52]。事実、花森の文章は次のようにつづく。「はっきりいえば、ぼくたちが、国の政治に参加できるのは、投票所で投票用紙を箱の中に入れる、あの一秒か二秒だけである。たったそれだけである」[53]。疑問は選挙だけにとどまらない。必然的に、議会政治の前提への不信にまでつながっていく。「たったひとりの人間が、何万何十万の、顔もちがえば、おもっていることもちがう人間の考えを、どうして代表することができるのか」。代理・代表（representation）という、代議制民主主義の根本的条件への懐疑に到達した。

花森は、特定の政治家が特定の集団、団体、企業の利益を代弁するのはなぜかとつづける。そして彼は、鍵になっているのは「カネ」の力だと指摘する。「政治家が大企業や大組合や大圧力団体のために動くのは、動くとカネが入るからである」[54]。しかしながら、市民にはそれと同じことをするだけの力（カネ）がないと花森は考える。「ぼくらのために動き、ぼくらの幸せのために動いたって、僕ら大企業でもなく大組合でも圧力団体でもないものはカネを出すことはできない。だから口先はともかく、しんぞこから、ぼくらために動く政治家はいない」[55]。そもそも利益表出のメカニズムにおいて、市民は圧倒的に不利な位置におかれている。にもかかわらず、選挙で代議士を選んでいる現行の代議制民主主義は、その不均衡にアプローチすることができない。となると、（代議制）民主主義というシステムそのものが、じつは最初から茶番にすぎないのではないか。花森は、田中角栄や自由民主党といった政治の個別具体的な人や組織の水準だけでなく、選挙制度そのものに絶望したのだった。そこから引き出された彼の結論は、「わざわざ投票所へ出かけていって、口先はともかく、腹の底では、ぼくらのことなど、虫けらほどにも考えていない人たちのために、民主主義的に、ちゃんとえらばれた、という見せかけを作り上げるダシになることはないのである」。民主主義の＜フリ＞をするだけのわざとらしい演技に参加しつづけることに、花森はいよいよ耐えられなくなった。

こうして花森は、自ら企画・編集を担う『暮しの手帖』の誌上で、自分の投じる無効票が現実政治においてはなんら効果のないことを承知しつつ、その行為をあえて選びとることを宣言したのだった。「政治という名の下で、ぼくらをダシにするこんな仕組みが堂々と、もっともらしく行われているかぎり、ぼくは、何回でも何十回でも、生きて歩けるかぎり、投票所へいって、投票用紙に、しっかりと、×を書きつけてくる」[56]。戦争の記憶と「公害」を鍵としてふかまっていく戦後政治、現代日本社会にたいする彼のペシミズムは、いまや代議制民主主義をつうじた変革の可能性への諦念へと転じたのだった。それほどまでに、彼の危機感はふかい。実際のところ、数十万部の発行部数を誇る『暮しの手帖』誌上での花森の訴えは、危機感の共有という点ではなんらかの影響力が期待できたかもしれない。しかしながら、長年にわたって彼が取り組んできた、日常生活のミクロな現場での変革をつうじた社会変革というビジョンという点から考えると、この提言にはどうにもならない閉塞感が漂っていることは否定しがたい。数年前の「みなさんものを大切に」ではかろうじてギリギリのところでつながっていた「希望」が、「28年を追悼する歌」で「贖罪」の必要性へと転じ、1976年の「ぼくは、もう、投票しない」になると、ついに政治的変革の可能性全般にたいする「絶望」へといたったのである。カネをつうじて組織された大企業、圧力団体、政治家の利害に対抗するだけの「ぼくら」（市民）の声を組織することへの無力感が、国政選挙をつうじた影響力の行使という文脈で、最終的に無効票という、戦略とも戦術ともいえないような方法をとらざるをえないところまで、花森を追い込んだ。

もっともこの投票ストライキは、あくまで花森個人の決意として発せられた宣言で、読者にたいして明示的なかたちで投票ストライキに参加することや、ましてや棄権を勧めているわけではない

52　ルソー『社会契約論』桑原武夫、前川貞次郎訳（岩波新書、1954年）、133頁。ルソーの文章は次のようにつづく。「その自由な短い期間に彼らが自由をどう使っているかをみれば、自由を失うのも当然である」（同前）。

53　花森「ぼくは、もう、投票しない」、同前。

54　同前。

55　同前、59頁。

56　同前。

ことはたしかである。それは、徹底した個人主義という、花森自身の思考のクセとでもいうべきものと関連している。「もともと、ぼくは、徒党をくんで、なにかをする、ということができない。ケチな考えかもしれないが、衆をたのんでなにかを言ったり、なにかをしたりするのは、好きではない。……このストライキはぼくひとりでやるストライキである。そんなことをしても、なんの効果があるものか、じぶんだけの、したり顔のおもいあがりにすぎない、といわれても、ぼくは、じぶんひとりでやる」[57]。興味ぶかいことに、その生涯をつうじて宣伝、広告、出版という、言論をつうじて人びとの認識に働きかける仕事に従事してきた花森は、その思考の芯においては徹底した個人主義者であろうとした。そもそも、彼が「暮し」の概念で提起した、自らの意志と判断力において生きることを重視する価値観は、なによりまず花森自身の思想と行動を律する基準であったといえよう。その個人主義が、ここでは自由の発現としてではなく、政治的諦念の一部として機能している。

美学者の中井正一は、敗戦から間もない頃に、政治的無関心を4つの類型に分類して論じたことがある。そのひとつは、変革の可能性をかけて政治にコミットしたものの挫折し、諦めの境地にいたるというもので、中井はこの種の政治的無関心のありようを「敗退的遊離」と名づけた[58]。1976年の花森がいだいていた絶望は、この「敗退的遊離」として理解できるように思われる。ただし彼が「挫折」したのは、これがはじめてではなかった。すでにふれたように、戦時中の花森は大政翼賛会のもとで総力戦体制確立のための宣伝＝プロパガンダに携わっていた。その意味で1945年8月15日は、彼にとって「第一の敗戦」とよぶべきものだった。この「敗戦」が『暮しの手帖』をはじめとする戦後の彼の言論活動を貫く縦糸の役割をはたしていたことは、すでにみてきたとおりである。戦時の国策プロパガンダへの参与について、花森はあまり言葉を残していないが、1972年の以下の短い文章から、彼の思考を読み取ることができる。

> 戦後だけでなく、明治以来、新聞のやってきた最大のマイナスは、といわれたら、やはり、こんどの戦争を、ついに防ぐことができなかった、そのことではないだろうか。ぼくに至っては、戦争を防ぐどころか、一生けんめい、それに協力してきたのだ。……けっきょく、ペンは剣より強いのだ、とじぶんに言い聞かせるより仕方がないのではないか。もっとはっきりいうと、この言葉が、そらぞらしいとか、なんとかいって、あごをなでているのではなくて（むかしのぼくが、そうだった）じぶんの、このペンで、剣より強いことを、じっさいに見せる、そのほかに、みちはないのではないか。……ぼくは編集者である。ぼくには一本のペンがある。ぼくは、デモにも加わらない。ぼくは座りこみもしない。ぼくには、一本のペンがある[59]。

ここからは、「ひとりで闘う」という言論人としての矜持こそ、自らの戦時経験をテコとして選びとった花森の政治的覚悟であることがわかる。彼はペンの力をデモや坐りこみから区別している。ただし、その理由にはついて彼は説明していない。民主主義政治における集合的主体の位相の重要性について考えるとき、じつはこの区別こそ、花森が「絶望」を深めていった要因のひとつだったように思われる。しばしば職人気質の「宣伝技術者」と評されてきたように、ひとりで闘うことを選びとった花森が多用する「ぼくら」という集合表象のありかたこそ、行き詰っていたのではないか。

6）むすびにかえて

花森は、市井の人びとの思想と行動の合理化をつうじた民主主義政治の社会的基礎を構築しようとした。しかしながら、これまで検討してきたように、高度経済成長以後の消費社会のありよう、そしてそれを促進するばかりの現実政治の展開に対抗し、ペンの力による日常性への介入をつうじて「品質のよい政府を持つ」という彼の目標は、高度経済成長がもたらした現代日本の「繁栄」とは裏腹に、ますます実現から遠ざかっていった。「暮し」の変革にかけた花森の政治的企図は、敗戦から30年を経た晩年にかけて孤立し中絶を余儀なくされ、「第二の敗戦」をむかえたのである。

---

57 同前、55頁。

58 中井正一「知識と政治の遊離」、『中井正一エッセンス』（こぶし書房、2003年、初出は1948年）。

59 花森安治「わが思索わが風土」、『朝日新聞』1972年6月17日。

1970年代の花森のテクストが私たちに開示しているのは、人びとの生を飲み込みながら展開する現代資本主義の論理と「政治」の私物化とが、人びとが生きる制度的基盤と環境を破壊すると同時に新たなタイプの政治的無関心を生み出していく社会の様相であり、戦争の記憶を媒介として公害としての政治を批判しつつ、ペシミスティックに変化していく彼の思考の筋道だった。すでにみたように、花森は1969年の「見よこの一銭五厘の旗」で、目先の繁栄に浮かれて人間社会と自然環境の両者の基礎が損なわれ、1970年代が「幻覚の時代」になる危険性を訴えた。その危惧は現実のものとなり、人間的な生を保証する「品質のよい政府を持つ」ことができずにいる現状への苛立ちと焦燥感が、彼の絶望を深めたのである。

戦後政治史をふりかえるとき、1970年代には教育、福祉、環境問題など市民の日常生活に密接にかかわるイシューに焦点をあわせたローカルな社会運動がひろがり、東京、神奈川、大阪をはじめ数多くの「革新自治体」が出現した時代だったことを思い起こしておくことは、きわめて重要である。花森がいだいた無力感とは反対に、そうした政治動向を生みだす原動力となった市民のなかに、『暮しの手帖』の読者がすくなからずふくまれていたであろうことも想像にかたくない。また、彼が「投票しない」と宣言した1976年の衆議院議員選挙（ロッキード選挙）での投票率は70パーセントを超えており、有権者の無関心と低投票率が繰り返し問題にされている、2010年代日本の代議制民主主義の風景とは大きく異なっていることも、基本的事実として確認しておくべき点である。

これら社会状況のおおきな違いを認めながらも、人間もふくめてあらゆる存在とその価値が経済化されていく新自由主義イデオロギーに満ちている2010年代に生きる私たちにとって、花森の個性に満ち、かつ戦略的な文化政治の取り組みから学ぶことは多い。事実、この小論に引用した彼のことばの数々は、2010年代の日本や世界への警句として読んでみても、そのまま通用するように思われる。興味ぶかいことに、現代の国民国家と資本主義のシステムが新自由主義の登場と進展とともにおおきく姿を変えていることをふまえたうえでなお、花森のテクストは、2010年代末の私たちが、半世紀ちかく前に花森が格闘していた「公害としての政治」の延長線上にいること、「品質のよい政府を持つ」ことがどれほど困難であるかを教えてくれる。

彼が立ち止まった地点に残されたものをひとことで表現するなら、「政治そのものが公害でしかないとき、ひとは何をなしうるのか」という問いだった。思想史の読みとして重要なのは、花森がそのなかで格闘していた言説編制のなかに矛盾や亀裂を発見し、そこに民主主義政治の潜勢力を読み取っていくことにある。そのために必要なのは、花森の絶望を単純に失敗や挫折として切り捨てるのではなく、一義的で決定論的な読みからこぼれ落ちてしまう思想の重層性、もしくは「襞」として読みとることだと考えられる。そのとき私たちは、花森安治の「絶望」をどのように評価することができるだろうか。それはたんに思想と行動が停止する地点なのだろうか。花森がその生涯を閉じたために「終わり」に見えているかもしれない彼の「絶望」を、あらたな別の展望への参照点として読みとることができないだろうか。戦後日本の経済的繁栄の只中に生じた無力感と絶望を、逆に民主主義政治を鍛えなおすための鉱床として読みなおすことは、いかにして可能だろうか[60]。

紙幅も尽きたので、この作業の補助線になると思われるふたつの論点に言及し、今後の課題をあきらかにすることで本稿を結びたい。ひとつは、さきほど言及した、花森が一貫して用いる集合的一人称をめぐる問題である。＜ぼくら＞とはいったい誰をさすのか。それは民主主義政治の担い手として、いかに概念化されているのか。これは概

60　ここでの絶望についての考えかたは武藤類子から示唆を受けている。2011年3月にはじまった東京電力福島第一原子力発電所事故が生みだした困難な状況をめぐって、武藤は次のように語る。「確かに人は希望がなければ生きられませんよね。でも、この絶望的な情景を私たちは認識する必要があります。これが、この国がしていることなのだと。それは、怒りや悲しみを深くするし、熟成させると思うんです。そこから私は、展望が生まれると」。Mutō Ruiko, “‘We need to recognize this hopeless sight.... To recognize that this horrible crime is what our country is doing to us’ : Interview with Mutō Ruiko,” interviewed by Katsuya Hirano, translation by Ryoko Nishijima, transcription by Akiko Anson, *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, Volume 14, Issue 17, Number 4, September 1, 2016. <https://apjjf.org/2016/17/Hirano.html> <Accessed on September 26, 2019>; Norma Field, “From Fukushima: To Despair Properly, To Find the Next Step,” *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, Volume 14, Issue 17, Number 3, September 1, 2016. https://apjjf.org/2016/17/Field.html <Accessed on September 26, 2019>

念的な問いであると同時に、戦後日本社会の変容とのかかわりで、花森のよびかける相手（宛名）の同一性の構築とその変容を考えることを可能にする問いでもある。もうひとつは、1970年代のポスト高度経済成長期から1980年代のバブル経済へと展開するこの時期の、文化のあらたな商品化の形態にかかわる問題である。この時期には、セゾン文化の台頭にみられるように、資本の論理に対抗するのではなく、資本の内部にみずからの位置をとり高度消費社会に生きる人びとの欲望を喚起する、あらたな文化運動が姿をあらわしていた[61]。百貨店、広告代理店、スポンサー、コピーライターの連携をつうじて構築される運動やそのことばづかい、提示される世界観は、当然のことながら、同じく広告宣伝の技術者の経験をもちつつ個人主義的志向のつよい花森安治（ならびに『暮しの手帖』）の戦後民主主義的な構えとは、まるで異なっているように思われる。そのあらたな思想の動向は1970年代後半以降の民主主義政治のありかた、人びとの政治的想像力のありかたにどのようにかかわっているだろうか。これらの主題は、戦後日本思想における文化の政治学の探究に、そして民主主義をめぐる政治思想史研究の深化に欠かすことのできない課題と考えられる。稿をあらためて論じることにしたい。

＜参照文献＞

花森安治／『暮しの手帖』（発表年順）

花森安治「あとがき」、『暮しの手帖』96号（暮しの手帖社＜以下略＞）、1968年。

「戦場」、『暮しの手帖』96号、1968年。

花森安治「商品テスト入門」、『暮しの手帖』100号、1969年。

花森安治「もののけじめ」、『暮しの手帖』第2世紀1号、1969年。

花森安治「国をまもるということ」、『暮しの手帖』第2世紀2号、1969年。

「これは困る、いかになんでもひどい、そういうテレビ番組があったら投票してください――番組提供者に考え直してもらうために」、『暮しの手帖』第2世紀3号、1969年。

花森安治「番組制作者の責任について」、『暮しの手帖』第2世紀3号、1969年。

花森安治「見よぼくら一銭五厘の旗」、『暮しの手帖』第2世紀8号、1970年。

花森安治「禿鷹のような商人」、『暮しの手帖』第2世紀11号、1971年。

花森安治「みなさん物をたいせつに」、『暮しの手帖』第2世紀16号、1972年。

花森安治「わが思索わが風土」、『朝日新聞』1972年6月17日。

花森安治「1平方メートルの土地さえも」、『暮しの手帖』第2世紀17号、1972年。

花森安治「未来は灰色だから――こどもたちに　いま親たちがしてやらねばならないこと」、『暮しの手帖』第2世紀21号、1972年。

花森安治「乱世の兆し」、『暮しの手帖』第2世紀22号、1973年。

花森安治「28年の日日を痛恨する歌」、『暮しの手帖』第2世紀25号、1973年。

花森安治「スーパーは安いか」、『暮しの手帖』第2世紀27号、1973年。

花森安治「乱世物価乱気流」、『暮しの手帖』第2世紀28号、1974年。

花森安治「買いおきのすすめ」、『暮しの手帖』第2世紀28号、1974年。

花森安治「もう、時間はいくらも残っていない」、『暮しの手帖』第2世紀30号、1974年。

花森安治「公共料金の値上りと総理大臣」、『暮しの手帖』第2世紀33号、1974年。

花森安治「国鉄、この最大の暴走族」、『暮しの手帖』第2世紀37号、1975年。

花森安治「あの台風下、東海道線の列車は揖斐川の鉄橋をふだん通り渡っていた」、『暮しの手帖』第2世紀38号、1975年。

松田道雄「浮動票のすすめ」、『暮しの手帖』第2世紀42号、1976年。

花森安治「ぼくは、もう、投票しない」、『暮しの手帖』第2世紀44号、1976年。

浦松佐美太郎「民主主義について」、『暮しの手帖』第2世紀46号、1976年。

『「花森安治の仕事――デザインする手、編集長の眼」展図録』（読売新聞社、2017年）。

その他（ABC順）

Norma Field, “From Fukushima: To Despair Properly, To Find the Next Step,” *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, Volume 14, Issue 17, Number 3, September 1, 2016. <https://apjjf.org/2016/17/Field.html>

藤田省三「新品文化――ピカピカの所与」、藤田『精神史的考察』（平凡社ライブラリー、2003年、初出は1981年）。

葛西弘隆「花森安治と戦後民主主義の文化政治」、『津田

61 ここで私の念頭にあるのは堤清二（辻井喬）や糸井重里である。戦後日本思想・文化における堤清二の意義を検討する近年の取り組みとして、以下参照。『ユリイカ』2014年2月号（特集――堤清二／辻井喬）。『堤清二――セゾン文化、という革命を起こした男。図録』（松本市美術館、2017年）。

塾大学紀要』第 50 号、2018 年。
葛西弘隆「花森安治と北海道――開拓・棄民・国家」、『国際関係学研究』第 44 号、2018 年。
栗原彬編『六〇年安保』、栗原彬、テッサ・モーリス - スズキ、苅谷剛彦、吉見俊哉、杉田敦編『ひとびとの精神史』第 3 巻（岩波書店、2015 年）。
丸山眞男「個人析出のさまざまなパターン――近代日本をケースとして」、『丸山眞男集』第 9 巻（岩波書店、1996 年、初出は 1968 年）。
Mutō Ruiko, “‘We need to recognize this hopeless sight.... To recognize that this horrible crime is what our country is doing to us’ : Interview with Mutō Ruiko,” interviewed by Katsuya Hirano, translation by Ryoko Nishijima, transcription by Akiko Anson, *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus,* Volume 14, Issue 17, Number 4, September 1, 2016. <https://apjjf.org/2016/17/Hirano.html>
中井正一「知識と政治の遊離」、『中井正一エッセンス』（こぶし書房、2003 年、初出は 1948 年）。
成田龍一『近現代日本史との対話――戦中・戦後――現在編』（集英社新書、2019 年）。
ルソー『社会契約論』桑原武夫、前川貞次郎訳（岩波新書、1954 年）。
『堤清二――セゾン文化、という革命を起こした男。図録』（松本市美術館、2017 年）。
吉見俊哉編『万博と沖縄返還』、栗原彬、テッサ・モーリス - スズキ、苅谷剛彦、吉見俊哉、杉田敦編『ひとびとの精神史』（第 5 巻）（岩波書店、2015 年）。
『ユリイカ』2014 年 2 月号（特集――堤清二／辻井喬）。